大村 晋二郎
OMURA, Shinjiro

防御と解放

ニットテキスタイルによる衣服造形

Protect and Liberate Oneself
Modeling Clothes of Knit Textiles

はじめに

本研究の目的は、日常生活の中における人との関わりから生じる心理を、ニットテキスタイルから衣服造形し考察することである。

本研究に至った経緯は、日常生活における意識に起因する。私は常に人の視線を気にしながら生きている。会話する相手からむけられる視線、道を歩いている際の他者から浴びる視線が、常に気になり心が過剰に反応してしまうのだ。人は私を見て何を感じ、どう思っているのかと考えるだけで心が掻き乱されてしまう。この言葉にならない心の中にある曖昧な感情を身体で表現できないかと考えてきた。人には衣服という他の生き物にはない第二の皮膚が存在する。自己と他者の間で生じた視線から生まれる防御と解放心をテキスタイルと衣服で表現できないかと考えた。

また衣服造形をする上で様々な制作技法の中でもニッティングの技術に着目した。ニッティングによるテキスタイルの制作は自分の考えと表現を直感的に繋げることができる。従来の繊維素材にこだわらず多様な素材とニッティング技術の組み合わせ実験を繰り返し、ニットテキスタイルの多様性を探求すると共に防御と解放というテーマに取り組んだ。

自己をめぐる視線と心理の関係

私が対人関係において心が動揺し突き動かされる要因に視線が大きく関わっていた。そこで、「見る・見られる」という行為について「衣服と人の関係性」を交えて先行研究の文献から考察した。

はじめに春木豊氏は、体・心・動きの相即の様相について『まず動きは、体的性質を持つレスポンデント反応(反射)と心的(意志的)性質を持つオペラント反応に分けられるが、体と心が二重になっている反応としてレスペラント反応(反射/ 意志的反応)の存在を指摘した。体と心に密着した反応はレスペラント反応である。』と述べた。「見られる」行為のみでは、無意識のうちに生まれる反射的なレスポンデント反応であるが、「見る」行為を含んだ「見る・見られる」行為の視線の関係性には、意識と無意識が混在する、言わば反射的であり意志的であるレンペラント反応であると考えられる。

「見る・見られる」行為が人に及ぼす作用についての結果から、視線から生まれた経験について考えが及んだ。視線による衝動は毎日起きていて(起きているはずで)、その経験は自身を形成する上で、自己を認識する上で大切なものなのではないか。経験を考察する上で、茂木健一郎氏は『意識とはなにか』の中で以下のように述べた。『私たちの中で、〈あるもの〉が〈あるもの〉として成り立つということは、それが、ある特定のクオリアとして感じられるということである。』『クオリアは、私たちの意識の中で〈あるもの〉が〈あるもの〉であることを支える、意識の基本的な性質である。』。経験は意識を構成する上で重要な情報であり、自身の考え方に影響してくる。この経験からのクオリアによって、人は衣服を選んで、着ている。ある特定の衣服をどのように感じるか、なぜそう感じるかは、その衣服がそういう状態になっている情景を「見た」ことによる経験からの影響である。

視線と経験を考察する上で、コンプレックスが密接に関わってくるのではないかとそ推測した。コンプレックスとは一般的にコンプレックスとは悪いものと認識できる。悪しきコンプレックスを抑圧し成功している状態とは、コンプレックスとなった経験ではない異なる経験から生まれた価値観から、自分自身が納得のいく答えを導き出していると考えることができる。問題を克服するには、その人なりの納得のゆく答えを見つけ出すことである。その人なりの納得する行為の根元には、問題の原因となった経験の消化を、他のあらゆる経験から自分で導き出した結果である。

これまで述べてきたことから、衣服と人について考察をする。例えば、自分の身体より大きな衣服を着る理由として、自分の身体が小さいからそれを隠そうという心理からであったとする。なぜ隠そうとするのかというと、何かしらの経験が自分にとって小さい身体をコンプレックスとして消化してしまったからである。ここで、コンプレックスをコンプレックスのままにしている場合、自分に納得ができずただ単に身体を隠すように大きな衣服を着る、すなわち「見る・見られる」関係の中で「防御」しているだけである。しかし、コンプレックスをコンプレックスとして受け入れ、あらゆる経験から自分自身が納得のいく形へ変容させることができた場合、大きな衣服を着るにしても、自分の身体を受け入れた上で、調和したと感じる大きな衣服を着る、すなわち「見る・見られる」の関係の中で「防御」であり「解放」となり得る。

どれほどまでに自身の周囲の社会や他者からの影響・経験があったとしても自分自身を確立するために、それを消化し納得のいく形にするのは、他者ではなく自分である。衣服には、「見る・見られる」行為が否が応でも付きまとう。そして、視線には心を突き動かす強い経験が含まれている。その経験が、人の周囲の環境によってはコンプレックスとなることもある。しかし、コンプレックスとなることは何も問題ではない。たくさんの人と出会い、いろいろなことを経験してゆくことで、自身を豊かにし、コンプレックスを自身の一部とできる納得のいく答えを見つけていくことが可能となる。

参考文献

春木豊 著『動きが心を作る』講談社、2011 年

茂木健一郎『意識とはなにか―〈私〉を生成する脳』ちくま新書、2003 年

河合隼雄『河合隼雄著作集第 II 期 第 1 巻 コンプレックスと人間』岩波書店、2001 年

作品について

修了制作は、1年次後期作品に制作した《Glance-01》から派生したシリーズとして《Galnce-03》~《Glance-07》を制作した。 “Glance” という言葉には、「閃光、きらめき」という意味と、「ひと目、ちらりと見ること」という意味が含まれている。ふとした瞬間に行き交う視線により、他者がいる世界の中の自分を見つける。他者を認識し自分に納得をした時、人は輝いているように感じる。

他者がいる世界の中で自分に納得する行為には、経験と密に関わっていると感じる。経験からのコンプレックスが、自分が他者に向ける視線、他者から自分に向けられる視線に影響を与え感情へと変換される。《Glance-03》、《Glance-04》では視線から生まれた感情の変化の経験を表現し、経験から構築された殻のようなテキスタイルに守られながら、その殻を脱ぐように隙間から身体が現れるような造形を作り上げた。《Glance-05》、《Glance-06》、《Glance-07》では衣服の特徴である袖や裾などの役割を分解し、ニットテキスタイルと肌が大胆に関わり合い人の美しさを増幅させる造形を作り上げた。

左から《Glance-03》《Glance-04》《Glance-05》《Glance-06》《Glance-07》
塩化ビニール加工糸(3掛)(金、銀)、レーヨンラメ入カラーゴム糸(白金)、シルクモヘア(黒、白)/家庭用編機を用いた編み
PVC corting thread(Gold and silver), Rayon rubber thread with metalic ribbon(White and gold) and Silk mohair yarn(Black and white) / Knitting by domestic knitting machine

岡本 風愉
OKAMOTO, Fuuyu

生きるようにつくること
Creating in the Way You Live

はじめに
私は「生きるようにつくること」というテーマで研究制作を行った。何かを新しく描いたり、作ったりするまでもなく、人が生きること自体がなにかをかたち作っているのではないだろうか。布は人の生活に必要不可欠であり、人の生活とともに古び、変容していく。私は、人が布に残す痕跡を作品として見せたいと考えるようになった。坂口安吾は『坂口安吾 ちくま文学全集』の「日本文化私観」でこのような言葉を残している。

美とは、特に美を意識して成されたところからは生まれてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからず必要のみ応じて、書きつくされねばならぬ。ただ「必要」であり、一も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。そうして、この「やむべからざる実質」がもとめた所の独自の形態が、美を生むのだ。[1]

布にあらわれたシワとは、何もないところから生まれたものではなく、日常生活で洗ったり、乾かしたりと日常に必要な日課の中でつくられるかたちである。坂口安吾のいう「やむべからず実質」に通ずるところがあるように思う。そうして私は布のシワを描くことによって生活の痕跡を残すことを試みるようになった。

生きる証としてのシワ
布のシワに着目したきっかけは、2018年8月から12月まで交換留学のためノルウェー・オスロで生活した経験によるものだった。環境・文化・言語が全く異なる土地で自身のアイデンティティが揺らいだ時、日本から使わずに持て余したシーチングをスーツケースに入れて持ってきていたことを思い出した。それらはあまりにもしわくちゃであったが、そのシワを見てとても懐かしく感じた。日本に住んでいた頃の時間がシワという証になって布に現れていたように思ったからである。私にとって布のシワの形をなぞり、様々な色彩で塗りつぶすことは、日本で過ごした時間を1歩ずつ踏みしめるように振り返ることと同時に全てが目新しい未知の世界であるオスロで過ごす日々の記録であった。

町にさわる
オスロから帰国後、「生きるようにつくること」について実践的に考えるため2019年4月から横浜・黄金町のアーティストインレジデンスプログラム(以後、黄金町AIRとする。)に参加することにした。黄金町AIRは認定NPO法人黄金町エリアマネジメントセンターによる事業の1つだ[2]。この取り組みには、かつて違法風俗街店舗が立ち並んでいた黄金町を住みよい町にするために、2009年からNPOと地域・行政・警察・大学・アーティストが連携し、アートによる町づくりを精力的に行うというものである。私が今回、黄金町AIRへの参加を決めたのは、月一回の他のレジデンスアーティストを交えた近況報告会や、町内会への参加、アートフェス、こども向けのワークショップなどを通して町との関係性を少しずつ深めていくことで「生きるようにつくること」について実践的に考えることにつながると考えたからである。また新しい町に暮らすことで、かつての暮らしや制作を俯瞰して観察することができると考えた。そうしてアパートの一室を借用し暮らしながら制作に励んだ。

生きるようにつくること
修了作品はアーティストインレジデンス中の自宅兼アトリエの壁を埋めるようにして帆布を貼り付け、毎日のルーティーンワークとして描いたものである。生きるように描くためには、生活することと描くことの距離を近付ける必要があると考え、布に描いては洗濯することを繰り返し、どんどんシワを更新しながら描くことを試みた。絵を描くというよりは、日々着た服を洗濯し干して、再び着るようなルーティンを繰り返すことで、生きた痕跡を地層のように重ねることができるのではないかと考えていた。そうすることによって布に命を吹き込み、第二の皮膚としての表現ができるのではないだろうか。私は布のシワに彫刻的な美しさを感じている。意図して作られたものではなく、人に使われ、時間とともに変容していく人の皮膚のような力強さがある。今後もその自然の美しさを縁どるような表現を模索し制作していきたい。

1. 坂口安吾『坂口安吾 ちくま文学全集』「日本文化私観」筑摩書房、1991 年、p.209
2. 黄金町エリアマネジメントセンター『黄金町アーティスト・イン・レジデンスガイドブック』2019 年

図1:《405》
サンカラー、帆布
Pigment on sailcloth

図2:《405》
細部1 / Detail1

図3:《405》
細部2 / Detail2

喻 琪
YU, Qi

人と時間の繋がり
グラデーション手法によるテキスタイルデザイン
Connection Between People and Time Gradation Methods in Textile Design

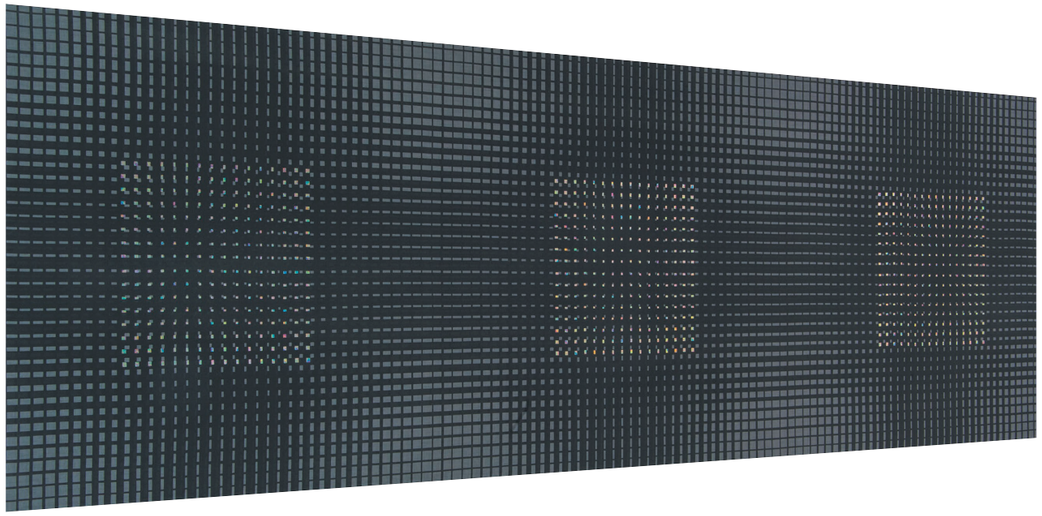
本研究では、人と時間の繋がりを呼び起こすためのテキスタイルデザインにおけるグラデーション表現をコンセプトに調査と制作を行った。テキスタイルを通じて観る人にイリュージョンのような感覚を与え、「時間の経過」を体感してらえるような空間を創出するデザインを目指した。基礎調査では、グラデーションおよび立体造形に関する事例を収集し整理と分類および分析を行った。技法調査では、型染め・シルクスクリーンプリントをはじめとする染色技法による試作を行い、テキスタイルにおけるグラデーション表現と立体的な表現を踏まえた作品《時1》《時2》シリーズを制作した。そして2年次に、クラデーションと立体造形に関する研究を行い、分析と考察を行った結果を踏まえ《黒・夜》《青・昼》《赤・夕方》《白・消えている》を制作した後、修了作品《連続発信する信号》《連続変化する星彩》を提示した。

2年間にわたりテキスタイルデザイン表現における空間と時の関係について研究してきた。2年生前期に制作した作品《黒・夜》《青・昼》《赤・夕方》《白・消えている》のシリーズでは、日常の時間帯によって、光の色が変わることを表した。例えば、夜は黒、昼は青、そして夕方は赤というように色によって時間を表現してみた。そして、布を複数枚重ねることで薄い布の中における空間の創出を試みた。1枚目は影を生む面(物体)を表現し、2枚目はその面が生んだであろう影をテキスタイルで作為的に表現した。私は、これらの作品をプランする際に、意味の含まれた1枚目と2枚目を合わせることで、まるで光が当たる物体としての面と面の下に現れる影のわずかな間に空間を想定していた。この2枚の布に挟まれた狭い特別な空間の中で作られた影は、プリントでリピートさせることで連続性が生まれる。影が誕生するその瞬間に、一瞬の時間の流れというか、表情にも似た特別な質的時間を表現することになる。その質こそテキスタイルにおける独創的な表現になりえるのではないかと考える。

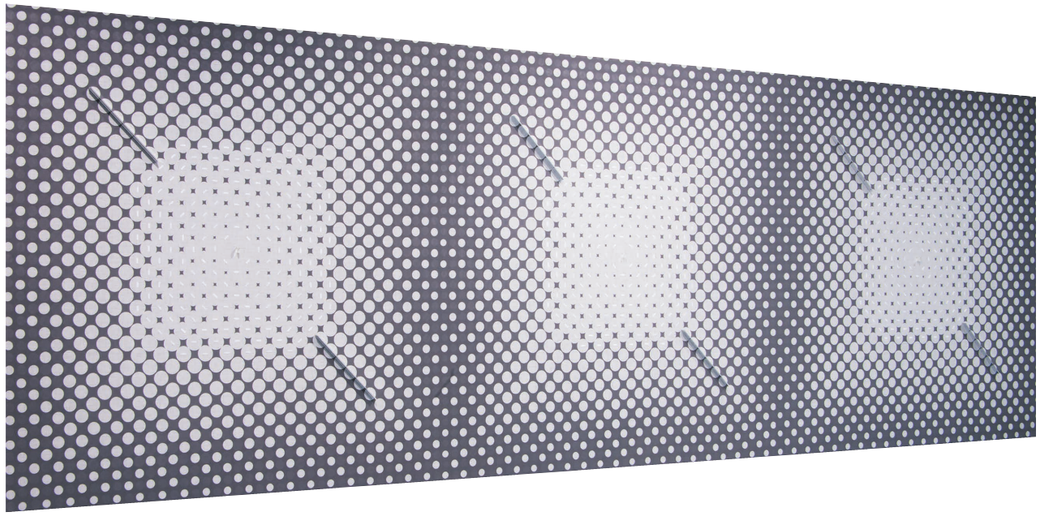
このような考えを背景に、修了制作に向けて展示も含めた材質について研究を実施した。例えば繊毛やフェルトのようなマットで光沢のない素材は、光を吸収されやすく光の表現がしにくい。逆に、光が見えやすい光沢のある素材や色として黒(夜)などは光を捉えやすくまた扱いやすいため、これらを表装などにも用いて表現力を高めることができる。

修了作品《連続発信する信号》《連続変化する星彩》のシリーズでは、光と空間と時の関係をさらに繋げるために、黒白を基調にした作品を制作した。黒は、夜、深遠な所、また過去を表す。白は、光、星彩、また未来を表す。素材は、オパール、オーガンジー生地を使用した。制作技法は、シルクスクリーン、浸染、箔シート、フロッキーシートを採用した。表装にはあえてアクリルミラーを使用し、反射した色や光がイリュージョン的な効果をもたらすことを想定した。これらのテキスタイル作品における表現では、具象や抽象、遠くや身の回り、人々の意識の中にある光を一つの空間に展示することにより、鑑賞者が時の長さや短さを強く感じるとともに空間を共有することを意図した。この作品では、私の研究テーマにある「人と時間の繋がり」を表現することができたと考える。表装で使用したアクリルミラーは、展覧会場において反射によるイリュージョン的な感覚を空間に創出する効果をもたらした。

本研究において、人と時間の繋がりを呼び起こすためのグラデーション手法によるテキスタイルデザイン表現をテーマに、テキスタイル上に視覚的にもインパクトの強い透視感のある空間を作り出すことができ、シンプルなグラデーション図形をデザイン構成することにより時間と空間を創出することを達成した。私がこのようにデザインしたテキスタイルを通じて、鑑賞者にイリュージョンのような感覚を与え、「時間の経過」を体感してもらうとともに、鑑賞者とテキスタイルに包み込まれるような空間を共有したい。本研究では、テキスタイルデザインの今後の新しい可能性を探究しながら、独自のテキスタイルデザインを提案できたと思う。



《連続発信する信号》/ "Signals being transmitted", 2020
オパール、オーガンジー、箔、アクリル / Opal, organdy, gold leaf and acrylic
91 × 273 × 3 cm



《連続変化する信号》/ "Starlight in changing", 2020
オパール、フロッキー、アクリルミラー / Opal, flocking and acrylic mirror
91 × 273 × 3 cm

呂 音
LYU, Yin

心象風景を纏う：テキスタイル表現による装飾的空間の構築

家にいる状態

Dressing on Mental Landscape: Construction of a Decorative Space in Textile Expression
My Condition at Home

図1 卒制の展示の写真

はじめ：

本研究はテキスタイルで私の心象風景を表現することをテーマとした。豊かな美意識を通して、「飽和感」に溢れ、全体から細部までの装飾で立体的に表現するために、絞り染めとビーズ刺繍のような技術を実現させた。制作過程での実験を含む異素材との対話により、生地の特徴的な表情を引き出すことに成功した。生地と生地または生地と異素材との様々な組み合わせを試みテキスタイル素材を開発し作品に導入した。

制作：

サブテーマ《家にいる状態》に基づき、衣服と空間の関係を考え、《悩み》では空間に連続されている状態を表現した。衣服から空間までは繋がりながらも、独立的に存在している。と同時に一体感のある状態を表現する。人々が生み出す気持ちや感情は実際には目に見えるものではないが、私はその目に見えない心象風景を視覚的に表現し、その結果として衣服と一体化するような空間を創出していきたい。

《悩み》

《悩み》(図2)をテーマに私の心象風景を視覚化し、衣服の表層から空間へと表現を拡張していった。感情というものを人の内面から衣服へ、そして周りに空間へと繋げていった。《悩み》シリーズは自分の消極的な生活態度を作品として表現したものである。悩みから生み出される悲しいものの美を体現することができた。

【制作技法】

絞り染：

背景の絞り分には、シルクを使用した。1回目に彩度の高い色で染色し、シワ加工を施すために生地を縫い絞りした。2回目の染色前に、さらに細かい絞りを施し、グレーで染めた。縦縞のテクスチャーでさざ波を表現し、パーツを使った。

ビーズ刺繍：

生地と生地の間にビーズ刺繍を施して、水面の光を描写した。透明なビーズで、水の質感を表現し、大きな涙は蜘蛛絞りで、小さい涙はオパール加工で表現した。

洋服：

洋服の部分は立体裁断でパターンを作った。オパール加工の生地を用い、生地の上にアンジェリーナファイバーを熱圧着で涙の形を表現する水滴状にし、金属色の糸で縫いた(図3)。生地の下に、パッチワキルト綿という芯を縫い重ねた。また、アクセサリーとして、ポリロンでポリエステルを染め、生地の上に衣服と同じ技法を使い、帽子の土台を完成し、縦縞のテクスチャーのポリエステルに絞り染を縫い付けた。

《自分の国》

《悩み》(図4)シリーズとは対比的で全く異なる愉快な気持ちを表現した。このシリーズにおいて、色彩のチョイスでは鮮やかで明快でコントラストのある色味を意図的に選択した。本シリーズでは王様というキャラクターからインスピレーションを受け、背景から衣服まで悩みシリーズに比べると厚みのある素材を選択することにより重厚な世界観を演出した。

【制作技法】

レーザーカット：

ここではレーザーカット技法を使いよりパターンを豊富にした。衣服では、王様のイメージに基づいて、絞り染めの王冠を制作した(図5)。王冠の黄色い帯部分、宝飾部分はレーザーカットで細部にわたる模様を表現した。5つの黄色い帯部分はそれぞれ私の人生で大切な5つの部分を表す。

洋服：

洋服の部分は、ポリエステル生地を染色し、フロッキーペーパーを加工し、ピンク色、赤とオレンジ色の円形をつけた。さらに、ベルベットのオパール生地加工を使い、こちらの二種類の素材を縫い重ね、洋服の部分を完成した。

背景部分：

背景の部分は、綿オーガンで1回目に黄色とピンク色で染色し、板締め絞りを施し、二回目に赤で染めた。提案図のような放射線の部分にはシルク絞り染と麻の染物を組み合わせた。まず1回目に桃色でシルクを染め、蜘蛛絞りをし、2回目にピンク色で染めた。そして、造形を守るため、黄色で網状の麻生地を染め、絞り染と縫い重ねた。

図2《悩み》の展示の写真図

図3《悩み》の細部の写真図

図4《自分の国》の展示の写真図

図5《自分の国》の細部の写真図